英語ができたら、

Hello! WORK

「英語ができたら、将来どんなことができるの?」…そんなみなさんからの疑問にこたえるべく、英語や外国での経験を生かしながら日本や世界で活躍するさまざまな方にお話をうかがいます。

執筆・取材協力：髙橋和子　写真：編集部

※10月16日（金）放送の“This Week's Special［This Month's Interview］”とあわせてお楽しみください。

FILE. 4 前編

インターナショナルスクール校長
玉木 由美さん

Tamaki Yumi

バングラデシュYOU&MEインターナショナルスクール校長。NPO法人YOU&MEファミリー代表理事。東京都の公立中学校で英語教諭をつとめたのち、2007年バングラデシュで学校を開設。翌年に日本からの献金により新校舎を建設。2013年に貧しい子どものための寄宿舎「Light House」を建設開始。2015年4月に日本の支援団体をNPO法人化、現在に至る。
www.youandmebangladesh.org

子どもたちの学力や才能を伸ばす仕事です

――玉木さんは日本の公立中学校で英語教諭をつとめたのち、バングラデシュで学校を開設、校長をつとめています。どのような仕事なのでしょうか?

教師のつとめは、子どもたちの学力や才能を伸ばしてあげること。その役割は日本でもバングラデシュでも変わりません。ただ、アジアでも貧しい国のひとつであるバングラデシュでは、経済的な理由で義務教育すら受けられない子どもたちが大勢います。貧しさゆえに親に捨てられる子どもや、10代前半で結婚してしまう少女もいます。「学校へ行かせる＝働き手を失う」と思っている親も多いので、「子どもの将来のために、学校に行かせてやってください」と、親たちを説得することも教師の大事な仕事になっています。

途上国の子どもたちの教育に人生をかけようと決意し、退職してバングラデシュを目指しました。

――バングラデシュで学校を開設したきっかけを教えてください。

きっかけは、自分自身のガンと、家族の死でした。2006年に、わたしの治療中に支えてくれた夫が亡くなりました。そのときわたしは、自分自身の生き方を見つめ直すことになりました。葬儀からほどなくして、10年ほど前に亡き夫からもらった手紙が出てきました。ボランティア活動に熱心だった彼が、3度目のバングラデシュ訪問の帰りの飛行機の中で書いた手紙で、「バングラデシュの人々は家族を大切にする。ぼくもこれからは家族を大切にしたい。いつかいっしょにバングラデシュに行ってくれ」という内容でした。手紙をもらったときは、それほど深くは受け止めませんでしたが、あらためて読んで、途上国の子どもたちの教育に自分の人生をかけたいと思い、「バングラデシュに行こう!」と決意しました。

中学校で生徒たちに英語を教える仕事は大好きでしたが、退職することにしました。もちろん教師としての責任がありますから、担任していた中学3年生の卒業を見届けたうえで退職しました。

――退職後すぐに、バングラデシュを初訪問したそうですね。

ある小冊子に、バングラデシュで学校運営をしていた女性の記事が載っていたのを思い出し、その方に面会をお願いして「NGOの活動に参加したい」と相談しました。その方は、「まず現地に行ってみて、あの国を好きになれるかどうか確かめてきてください」と助言してくださいました。そして現地の友人を紹介していただき、そのお宅に数週間滞在させてもらうことになりました。

バングラデシュで英語を教えてみたら生徒たちに大好評

――あらためて、バングラデシュという国についてご紹介ください。

バングラデシュは、インドとミャンマーと国境を接する国で、国教はイスラム教です。国土は北海道よりも大きいくらいで、1人あたりの平均月収は1万円弱。貧困の原因は、世界屈指の人口密度、不安定な政治体制、くり返される洪水などにあると言われています。

――バングラデシュの公用語はベンガル語ですが、現地の人たちとどのようにコミュニケーションをとったのですか?

バングラデシュの就学率は、小学校（1～5年生）は入学時90%台と高いものの、卒業時までに少しずつ下がり、その上の学年になるとさらに下がります。一方で、教育をしっか

り受けた人の英語力は高く、わたしが滞在したお宅の方々も、流暢な英語を話しました。小学校から英語の授業があり、英語重視の傾向は日本よりも強いと思います。かつてイギリス領土であった影響もあるかと思います。

バングラデシュでは
小学校から英語の授業があり、
英語重視の傾向は
日本よりも強いと思います。

――同国を初訪問した印象は?

近年のバングラデシュは、世界各国の企業の工場が次々と建てられ、日本企業の進出も増えています。しかし、わたしが初訪問した2007年当時は、空港でも市街地でもわたし以外の日本人は見かけず、行く先々で好奇の視線を感じました。農村部では英語が通じる人が少ないのでとまどいましたが、どの人もわたしがニコッと笑うと笑顔を返してくれて、「なんてすてきな国なんだ」とうれしくなりました。

――バングラデシュを好きになれると思ったのですね。

そのとおりです。また、この国に必要なのは教育だと強く思いました。そこでいったん帰国し、ボランティア教師を募集している同国の学校をインターネットで探して応募し、再びバングラデシュに渡り、小学校で2か月間英語を教えました。

――バングラデシュでの学校生活はいかがでしたか?

折り紙や歌、ゲームを交えた授業をしたところ、大好評でした。同国の学校では、教師は淡々と講義を進め、生徒は黙々と黒板の文字を書き写す、という授業が多く、アクティブなわたしの授業は新鮮だったようです。生徒たちは、道ばたでつんだ花や手描きの似顔絵、古いカレンダーで作った折り紙などをプレゼントしてくれました。物がなくても心が豊かで、精いっぱいの愛情表現をしてくれることに感動しました。

バングラデシュの学校の文化発表会の様子。左端が玉木さん。「全員で舞台に上がり、校歌を歌っているところです。だれもが自分の人生という舞台で主役だよ、というメッセージを伝えるために、いつも校歌の全員合唱をしています」

取材時の玉木さん。身につけているのは、バングラデシュの民族衣装、カミューズ(シャツ)、サロワ(パンツ)、オロナ(スカーフ)。

親たちを説得し ワハブ牧師夫妻とともに 新しい学校をスタート

――2か月間教えたあとはどうしたのですか?

腰を据えてこの国で教育に従事したいと考え始めていたときに、最初の訪問でお世話になった方が、「首都のダッカ郊外のガジプールという村に土地を購入して教会を建てた牧師夫妻が、学校開設を目指している」と教えてくれ、その夫妻に引き合わせてくれました。お会いしたワハブ牧師夫妻はすばらしい方々で、「この方々とともに学校を開こう」と心に決め、ワハブ牧師の礼拝堂を借りて開校準備を進めました。礼拝堂で働く2人の男性も教師になると言ってくれて、彼らとともにテキストをそろえ、近所の家を1軒1軒訪ねては「学校ができるので来てください。月謝は毎月100タカ(当時のレートで約170円)です」と説明してまわりました。

――生徒は集まりましたか?

初めての授業の日は、果たしてどのくらいの子どもたちが来てくれるのだろうとドキドキしましたが、26人もの子どもたちがはだしで集まってきました。授業は英語、ベンガル語、算数の3教科。さっそく授業を始めると、近くに学校がなくて勉強などしたことがなかった子どもたちが、ためらいながらもとても楽しんでいました。こうして学校はスタートしました。

ガジプールで学校を開いた玉木さんは、「愛のこもった世界一の学校づくり」を目指して、さらなる行動を開始します。11月号に続きます。

英語ができたら、
Hello! WORK

FILE. 4 前編
インターナショナルスクール校長
玉木 由美さん